

---

ノール（M） 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部屋』

スメル 8 『カプロン酸』」

一拍の間

ノール（M） 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通のデオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくすため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守っているんだ」

SE…ノックの音。

SE…ガチャ！とドアが開く音。

エリカ 「おはようございます、お姉様！」

ノール（M）「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ騒がしい子は、後輩のエリカ。実はデオフェアリー候補生なんだけど、ノールと一緒にカルモア学園で消臭の任務についているんだよね」

えり「おはようございます」

ノール（M）「こっちの、あざといロリっ子は、後輩のえり。

新入生で、消臭部に入部してきた変わった子。

どんな子なのか、まだ、よくわかんないんだよね」

ノール「じゃーん！」

エリカ「今週の服装はなんでしよう？」

ノール「今日は、駄目なひとには見えない制服」

えり「夏服ですね」

エリカ「ブラウスとスカートですか」

ノール「そう。ブラウスはボタンを多めに外して、大サービス」

えり「それは、おいろけまんてんですねえ」

エリカ「でも、胸元開けても特に見えるものはないですよね」

ノール「エリカ〜？」

エリカ「ぱつつんぱつつんのボインボインで、紳士の皆様は

目のやり場に困りますね、お姉様（棒）」

ノール「っていうか、単純に暑いもんね」

えり「部屋の中にも暑いですねえ」

エリカ「空調、止まっていますからねえ」

えり「PCが何台も動いてるのが良くないと思うんですよねえ」

ノール「それは学園の話？ 六本木ヒルズにあるどこかの

スタジオの話？」

エリカ「両方じゃないですかねえ」

えり「むし暑いですねえ……」

## 一拍の間

エリカ「今日はどこ行きますか？」

ノール「暑いから、林の中にでも行こうか」

えり「ふぁー、フィトンチッドやマイナスイオンでリラックス  
ですう」

ノール「林の中に吹く風は、きっとさわやかだよ」

エリカ「ああ、いいですねえ」

ノール「じゃあ、決定！ いってみよー！」

SE…ガチャ、とドアが開く音。

一拍の間

SE…蝉の音

エリカ「……お姉様」

ノール「……なに？（不機嫌）」

エリカ「風、吹いてないですね」

ノール「吹いてないね（不機嫌）」

えり「湿気、多いですねえ……」

---

ノール「草いきれってヤツかな……（不機嫌）」  
エリカ「林の中、かえって蒸し暑いですよ、お姉様！」  
ノール「なに、ノールのせい!? ノールのせいなわけっ!?!」  
えり「はうう、とけてしまいそうですう」

一拍の間

ノール「……おや？」  
エリカ「お姉さま……の、においですか？」  
ノール「明らかに、これはノールのおいじゃないってわかる  
よね!?!」  
エリカ「とりあえず、聞いておこうかと」  
えり「なんのにおいでしょうか？」  
ノール「……山羊くさい」  
エリカ「なんで知ってるんです、山羊のニオイ？」  
えり「はわー、いま流行りの農業高校出身ですわー」

ノール「ですね〜じゃない！ ノールはカルモア学園に通ってる  
っ！」

エリ「はわー!？」

エリカ「どこかに山羊がいるんですかね？」

ノール「そんなワイルドな学校じゃないでしょ」

ノール「これは……悪臭だよ！」

えり「山羊のニオイ、ですか？」

エリカ「でも、なんかこんな体臭の人居ますよね〜（嫌そう）」

ノール「めったなこといわないっ！」

ノール「（一拍おいて）山羊のニオイに代表される悪臭成分……

どこかに、カプロン酸があるはずだよ！」

一拍の間

ロン「やあ、こんにちは」

SE…それっぽい登場SE

ノール「だ、だれ!？」

エリカ「なんか、フレンドリーですね」

えり「さわやかな感じですよ」

エリカ「で、どちら様ですか？」

ロン「ボクは『カプロン酸のロン』！ 悪臭17人衆の一人  
なんだ」

一拍の間

エリカ「カプロン酸!？ デオアリーナをトランプにするときに

『トランプにするには、悪臭成分が1つたりないなあ』

ってことになって、急遽一種類増やされた成分という、

あの!？」

ノール「なんの話？」

エリカ「カルモアさんから来た資料も『山羊のにおい』だからね。

結構メジャーな表現なのかもね、えり」

えり「はわー、山羊のミルクで健康促進ですう」

ノール「なんだろーなー？ ノールのマイク、入ってないのかな

ー？ それともイジメかな？」

#### 一拍の間

ロン「でも、ボクについて書いてある資料だと山羊くさいと

いうのは表現がマシな方で、ひどいになると『ドブ臭』

『ぞうきん臭』とか書かれていたりするからね」

エリカ「それですよ！ ぞうきんのすえたにおい！ ああ、どこ

かで嗅いだような悪臭だと思ったら……スッキリしまし

た！」

ノール「エリカ、ぞうきんのおいでスッキリするの？ 変態？」

エリカ「そういう意味じゃないです！ ていうか、そんな

ハイレベルな変態なわけじゃないですか！」

ノール「レベル高いんだ」

エリカ「さすがに山羊のニオイだと引き出しはないけど、ぞうきんが腐ったにおいとかなら、上城がエピソードあるよっていつてますけど、どうしますか？」

ノール「いい、いらぬ！」

えり「はう……洗車に使った生乾きのぞうきんをトランクに放り込んで1週間出張に行ったあとにかえってきたら、色が変わったぞうきんが、しんなり異臭を放っていたってはなしですね〜(嫌そげに)」

ノール「どうして、かみじよーはなんでも腐らせるのかな!？」

エリカ「トランク開けたらむわっと……想像したくないですね」

ノール「かみじよー、セダンに乗るの禁止!!」

ロン「そんなわけで、学園内をボクのおいで満たすためにやってきたんだ。よかったら、案内してくれる？」

エリカ「ナンパ？ ナンパですか、これ？」

えり「ふわぁ、先輩モテモテですねえ」

ノール「うれしくないっ！ だいたい、悪臭に手を貸すわけには行かないよっ！」

ロン「そうなの？残念だなあ」

ノール「いくよーっ！華麗に変身ッ！でおどあーっ!!」

SE…変身SE&BGM

ノール「見た目はキュートに、中身は本気！デオフェアリー・

ノール！」

ロン「ああ！キミが噂のデオフェアリーだったんだ」

エリカ「噂って、どんな？」

ロン「四天王のノネノールを倒した……昭和がどうか、って

言う噂だったと思うけど」

エリカ「ああ、正解です。これがその昭和です」

ノール「昭和って言うなーっ!!」

一拍の間

えり「ふぁー、やっぱりかわいいですねえ」

エリカ「見た目はまあ、ねえ」

ノール「その奥歯にものが挟まったような言い方は、なんなのかな？」

エリカ「さすがお姉様魅力的！ 見た目はキュート、中身は昭和ですわっ！」

ノール「中身は『ほ・ん・き』っ!!」

一拍の間

ロン「でも、くさいニオイばかりクローズアップされるのは、心外だな。一応、バターの香りの元になる脂肪酸のひとつなんだけど」

エリカ「つまり、バターのいい香りも度を超すと山羊の体臭になるんですね」

ノール「『過ぎたるはおよばざるがごとし』だよ」

えり「はわー、論語ですね。さすが先輩、勉強になりますー」

ノール「いや、出典までしらないけど……」

一拍の間

エリカ「では、気持ちを切り替えて！ 今週のイラスト募集は

『夏服をだらしなく着こなす・ノールお姉様』です！

えり「採用された方には、『特製・夏服バージョン』の

デオフェアリー・ノールをプレゼントしちゃいますー」

ノール「だから、募集しないからっ!! 特製品もつくんないって

!!

ロン「作らないの？ 残念だなあ」

エリカ「実は、ロンのことがストライクゾーンど真ん中だという

スタッフ先輩とロンの、カップルイラストも同時募集

ですっ!」

ノール「あの紙袋に惚れ葉チョコとか禁止ーっ!!」

一拍の間

ロン「えっと、じゃあ……そろそろ行こうかな」

ノール「もつとゆつくりしてればいいのに」

エリカ「こちらに断りをいれるあたりが、律儀ですね」

ロン「いくよっ！ ……ぞうきんのニオイを、臭塗ッ!!」

SE…臭塗っぽいSE

エリカ「これが山羊のにおいなんですねーっ！」

えり「なんか、ぞうきんがすえてるにおいですー」

ノール「おのれ、ドブのにおいー!!」

ロン「みんな、ひどいなあ」

ノール「事実じゃん！」

エリカ「でも、イマドキの若い子にドブのにおいって言ってもわ

からないですよ。さすが、お姉様は昭和ですねえ」

ノール「うるさいっ！ いいから、エリカやっつけろー！」

---

一拍の間

エリカ「えー、なんか……かわいい男の子を殴るのは抵抗あり

ますよねえ」

ノール「毎回思うんだけど。エリカはスプレーを鈍器だと思ってるよね？」

エリカ「いや、ちょうどいい大きさだなあって」

ノール「うるさいっ！ えり、やっつけろ！」

えり「はうう、こんな優しげな男の人にデッドドリーレイブは

抵抗ありますよお」

ノール「だから、なんで超必殺技が前提なのかなあ、キミ達は!？」

ロン「えっと……ボク、どうすれば？」

エリカ「ここで、お姉様！ なんの空気も読まずに！」

ノール「もー、じゃあ……いくよっ！」

一拍の間

---

ノール「スタッフ先輩と妄想の世界でお幸せにっ！」  
ノール「らぶらぶぽっぴんぱんちっ!!」

SE…らぶらぶぽっぴんぱんちのSE

ロン「うわー、だめだー!! (棒読み)」

SE…悪臭退散のSE

ノール「よし、消したっ!!」

エリカ「思いつきり殴りつけましたね」

えり「うう、今週も情け無用でした……」

一拍の間

バスメル「おお！ノールちゃん!!」

ノール「わあ！今週もいきなりなの!？」

バスメル「そこを歩いていたら、神の声が聞こえたんだ――

出番はもうすぐだって、ね」

ノール「要するにタイミングはかってたってこと？」

エリカ「タイムキーパーでもいるんですかね、この学園」

一拍の間

ノール（M）「そんなわけでえ……（やる気なさそうに）」

ノール（M）「この、いきなりうっとうしい、キラキラ二枚目の

お兄ちゃんは『バスメル王子』」

ノール（M）「別にアラブかどこかの王子様ってワケじゃなくて、

ニックネームってヤツ？」

ノール（M）「なんでか知らないけど、ノールのことを妙に慕っ

ていて。何かというと、つきまとってクサイ台詞で口説

こうしてるんだけど。クサイ台詞って大の苦手なんだ

よね」

---

一拍の間

バスメル「キミを見ていると、ボクのハートが温暖化しちゃうよ」  
ノール「CO<sub>2</sub>排出規制すればいいんじゃないかな、息しない  
方向で」

エリカ「それは遠回しに、死んじゃえって言ってませんか？」

一拍の間

えり「ふわぁ〜……聞いていると、照れてほっぺが温暖化です

う〜（照れ）」

ノール・エリカ「「おーおーいっ!？」」

ノール「温暖化ネタに乗っかるの禁止っ!!」

エリカ「そのセリフは、さすがに片山さんも苦笑いですよ、

スタッフ先輩!!」

バスメル「ノールちゃんの姿を見る度に、ハートが燃え上がり、

のぼせたように何も考えられなくなる……ボクの恋心で、

冰山を溶かして海面上昇を招いてしまいそうだ」

えり「知的ですねえ。ノール先輩、うらやましいですよ」

ノール「いや、知的とかそういう問題じゃなかったよね？」

エリカ「むしろ、頭悪そうでしたけど」

SE・携帯の着ボイス音

バスメル「……ああ、ドワンゴ・ドット・JPでダウンロード

販売している、ノールちゃんの着ボイスが」

えり「かわいいですねえ。どこで手に入るんですかあ？」

ノール「はい、これからステマするよ。ドワンゴ・ドット・JP

取り放題の会員登録をすれば、いろいろな着ボイスがゲ

ットできるから、えりも会員登録した方がいいよ」

えり「はい、ありがとうございますう！」

エリカ「毎週質問してるのに、会員登録してないんですね」

バスマル「すまない、行かなくてはいけなくなったよ」

ノール「はい、さようなら（棒読み）」

バスマル「では、またあおう！ 恋のヒートアイランド現象!!」

SE・歩く音（F・O・）

ノール「あー、疲れた」

エリカ「暑いし、かえりましょう」

ノール「部屋のぞうきん、洗い直そう」

えり「はい、腐ってたら大変ですから」

ノール「天気もいいし。天日干しで殺菌して、きれいさっぱり」

エリカ「そこは『洗濯したらマイクロゲルで消臭!』とか、さり

げなくステマしなくていいんですか？」

ノール「ステマはさっきので充分でしょ？ 太陽の力を借りよう

よ、暑いし」

エリカ「さすが、恋のヒートアイランド現象ですね」

ノール「うるさいっ!!」

一拍の間

アン「あの子が、例のデオフェアリーね。かわいいじゃない」  
ジオ「見た目に惑わされるな。見ての通り、強力な消臭能力を  
持っている」

アン「でも、わたしを消しきれるかしら？」

ジオ「期待してるぞ、アン……四天王の力を見せてやってくれ」  
アン「うふふふ……」

一拍の間

エリカ(N)「こうして、カプロン酸は消臭された」

エリカ(N)「しかし、これで終わりではない」

エリカ(N)「最後の意味深な会話はなんだ？ 四天王と言って  
いたが、またアレみたいなのがくるのか？」

エリカ(N)「スタッフ先輩はロンを演じて満足しただろうか？  
今度はビッグバンなんかネタも入れ込んだ方がいい  
のか？」

---

エリカ (N) 「デオフェアリー・ノールの、消臭は終わらない…

…」

一拍の間

エリカ (N) 「漂う悪臭を、なんとする」

エリカ (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」

エリカ (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」

エリカ (N) 「マイクログルで、消臭する」

エリカ (N) 「また、来週も……」

ノール (N) 「『デオ・デオドアー!』」

おわり。